グループ	質問内容	回答内容
A	「関大について」という授業テーマですが、授業案の中で出てきた「グループでのフィールドワーク」とは、どのような活動をイメージしていますか。	発表班である4~5名のグループで千里山キャンパス内を探索し、関大の改善点（施設の設備的なことから勉学に関すること、関大の各種制度まで幅広く対象）をできる限り探し出してもらい、自分たちのグループが取り扱う課題の材料とします。
A	現在、様々な部署でアンケートや学生に対するイベントの周知などを実施しており、回答の対象者が回答してくれない可能性があるかと思います。 そこで、コンペティションで順位を決定するとのことで、具体的にどのような方法を取ると、一定の成果を得られるとお考えでしょうか。一定の成果の基準等もあればご教示ください。	回答対象者の学生については、各部署管轄の学生スタッフへの依頼を考えております。不特定多数の学生を回答者と想定してしまうと質問者様の仰る通り、回答が十分に集まらない可能性があります。このことを防ぐためにも、関西大学への貢献心が一般学生よりもあると考えられる学生スタッフへの依頼を想定しております。 一定の成果の基準については、授業参加学生が20名となりますので、20名以上を一定の成果の基準と考えております。コンペティションの順位決定基準は、授業関係者の票が50%、その他の一般学生・教職員の票が50%の得点割合になりますので、同数以上集まれば問題ないと考えております。
B	コロナの影響の大小や内容は、2020年～2022年の中だけでもかなり流動的であったと思います。どの期間について注視するかによって変わってくると思いますが、お考えはありますか。もしくは、コロナに限らない感染症と食についての授業でしょうか。	ご指摘のようにコロナの影響という点においては波があり、 また感染者数の実数が人々の不安感と比例しないこともあります。 ただ対象とする期間は、現時点で2年ほどなので、特定の期間を切り取るより、 この間を経年的に観察することに意味があるように思います。よって敢えて期間を設けていません。 また、本授業はコロナ禍における経験や出来事を中心に、食と感染症について考えていきますが、 学生が授業で考える「解決策」が、今後の新たな感染症流行の備えとなることも意図しております。
B	ゲストスピーカーはどのような人（企業？自治体？）を想定されていますか？	ゲストスピーカー講演会では、2.3名を招へいすることを想定しております。 ゲストスピーカーの候補者①：飲食店経営者（テーマ例：コロナ対策や行政の施策と経営について） 理由→コロナの影響を最も受けた業種の一つであり、様々な観点から問題点を提供できると考えるため。 ゲストスピーカーの候補者②：自治体の職員（テーマ例：行政の施策と人々の声について） 理由→コロナ禍において、行政の方針や自治体の決定が、人々の生活を大きく左右したため。また、様々な業種や市民の意見・要望が自治体に集まっていることが想定されるため。
C	関西大学の授業では、「SDGs入門」や「SDGsの実践」のような大規模授業があるかと思います。 その授業との違いや、また授業人数の制限等はどれぐらいの人数を想定しておりますか？	こちらの授業は「20～30名」程度の人数を想定しております。 （グループワーク3～4名を1組と想定しております。） 大きな違いは、自分で課題を見つけて、それを自分で考えて解決する取り組みが含まれる点です。 （主体的な学習によって、SDGsについて理解を促すところ）
C	評価基準が具体的で分かりやすかったです。SDGs推進企業の訪問先については、どのように決定する予定ですか。	関西大学が共同でSDGs に取り組んでいる「関西大学SDGs パートナー制度登録団体」を基準に決定します。
D	授業時間外学習において、具体的にはどのようなこと・ものを想定していますか？	何も成果物がなければ、授業外で行った事柄を評価しようがないので、授業時間外に行ったことを何らかの形式で提出してもらう、という案があるかと思います。日記のような完全な自由記述形式もありえますし、もう少し記述項目を明確化したワークシートを作成してもらうことも考えられます。最近であればVlogのような形式もありえますが、テキストデータの形で提出してもらう方が、評価の際に扱いやすいので望ましいと思われます。
D	人生で活かせるテーマを取り扱っており、ユニークだと思いました。例えば中間地点で、調べたことを「（仮にでも）実施」してみて、さらに調査が必要な部分を深める、ようなタイミングを設けるという話は挙がりませんでしたでしょうか。	検討段階の議論では、授業を通して考えたことや提案したことを「行動」に移すところまで含めてはどうか、という意見もありました。到達目標に「行動を起こす」という文言を入れたものの、そもそも各学生にとって有意義だと感じられる事柄であれば自然と行動に移すはずであるので、評価対象からは外して、実際の行動に移すかどうかは学生個々の判断に委ねる、という形になりました。
E	SDG s に関する身近な課題とは、どれくらい身近なものを想定していますか。どこまで落とし込むのか、というのが、課題解決において重要なことのように感じました。	学生が考える身近な問題を具体化することを授業に取り入れたいと思います。
E	最近の話題として、SDGsをテーマとして設定されたかと思います。どうして課題解決能力を向上させるにあたり、SDGsを用いることにされたのでしょうか。背景等ご教示いただけますと幸いです。	SDGsが現在の大学生にも適応可能なゴールとして設定されているので、問題発見やその分析の教材として有効と考えられます。
F	授業へ参加する学年によって、経験してきたものが異なると思いますが、参加年次にルールはありますか。もし無い場合は、その参加者間の溝をどのように埋めようと思っていますか。	参加年次にルールはありません。参加者間の溝は、ポジティブにとらえると、様々な意見が収集できると言えます。次の回答に被りますが、第二回の講義で受講生全員に基礎知識は学んでもらいます。それを踏まえ、それぞれの立場で自分なりの意見を持ち、交換することが、主体的で活発な学びに繋がると考えました。
F	「コロナ禍について」の第２回の講義はどのような内容を考えていますか？	例えば、コロナが蔓延し始めたころの報道、取られた対策、話題になったものごとなどの具体的な当時の様子を提示しながら社会の流れがどのようになっていったかを見ていきます。 ニュース番組はもちろん、新聞記事なども取り上げるつもりです。
F	相互評価をするうえで、仲の良いグループ同士が過剰に良い評価をしてしまう可能性が考えられますが、その対応をお考えであればご教示ください。	ここまで深く考えられていなかったのですが、取れる対策としてはルーブリックを用い、評価の基準を細かく設定します。あくまでも評価者になる体験を学習の一つと捉えているため、評価が何のためにあるのか、自分が行う評価がどの様な影響を及ぼすかということは第３回「今後の授業方針について(グループと評価方法)」の講義でお話しします。それですべて防げるわけではありませんが、多少の抑制効果は期待できると考えています。
G	口頭で紹介された「コミュニケーションのワーク①②」は、どのようにして探されましたか？このワークで得られた知見を、実践してみる機会は授業内でありますか。	実践の「計画を立てる」機会はある →最終発表（本授業で学んだこと・体感したことをどのようにして今後に活かすか　について発表） ①②のワークは、あくまでもコミュニケーションの多面性を体感・経験することを目的としている。したがって、普段のコミュニケーションにて実践できていることが理想である。 ①→以下のリンク https://careerhack.en-japan.com/report/detail/1117 （キャリアハック　記憶に残る「はじめまして」を）の内容を参考にしている。 ②→ 報連相ゲームを参考にしている。
G	グループワークやプレゼンテーションの評価に関して、もう少し具体的な基準（ルーブリック等）はお考えでしょうか。	以下がルーブリックの内容である。 A 意見の提示　→グループワーク評価 B 議論の環境整備　→グループワーク評価 C 発展（本質的理解）　→ 最終発表（プレゼンテーション）評価 A (1)自身の意見を提示していない (2)自身の意見を、根拠を持たない形で提示している (3)自身の意見を、一部根拠を用いながら提示している (4)自分の意見を、根拠を用いながら明確に提示している B (1)自身の意見を提示ぜず、相手が発言・質問しやすい環境をも醸成していない (2)自身の意見は提示するが、相手が発言・質問しやすい環境は醸成していない (3)自身の意見を提示しながら、相手が発言・質問しやすい環境を醸成している (4)自身の意見を提示しながら、グループ全員が発言・質問しやすい環境を醸成している C (1)コミュニケーションの多面性を全く理解していない（多面性に触れていない） (2)コミュニケーションの多面性を理解していない（多面性には触れられているが、自らのことばで説明していない） (3)コミュニケーションの多面性を理解している（自らのことばで説明している） (4)コミュニケーションの多面性を本質的に理解している（自らのことばで説明かつそこで得た学びをどのようにして応用（発揮・発信）する提示まで行えている）
H	情報の中身や媒体、リテラシーについては、5年間の間でもかなり大きく変遷すると思います。参加者間の知識や理解の溝を埋める方法は、グループワークのみでしょうか。実際に情報機器を触ってみる機会があってもいいのではと思いました。	第1回～４回の講義では、実際に各媒体（情報機器、書籍等含む）を用いて調査することで、得られる情報の特徴や注意点を発見できる機会を設ける。また、参加者間の溝を埋める方法として、他者との会話による意見交換を想定している。そのため、グループワークに加え、ＬＭＳの掲示板機能を用いた意見交換や教員のフィードバックを通じて、参加者間の齟齬を解消していく。
H	授業時間外学習において、フィールドワークでは実際どのようなことを実施するのか、例などはありますでしょうか。	新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化を調査するために、親や友人など身近な人との会話を通じて、当時の人々の思考や行動特性について情報を集める。 これらは、「情報媒体や収集方法によって得られる情報が違う」ことを体感するための活動として位置づけ、第5～8回目の講義で我々の行動を振り返る活動の一環とする。
H	第9回の講義において、LMSで質問等を募集したり、質問がないときは発問したりとありますが、どのような質問が考えられますでしょうか。授業の全体像をお持ちであれば、あわせてご教示ください。	予想される学生からの質問として、第9回までの講義で、学生同士で意見交換を行った際の情報のズレや原因（ex.情報媒体の違い、行政の対応、身近な人の影響など）、適切な行動とは何だったのかなどが挙げられる。 また、学生からの質問がなかった時の教員側からの発問としては、コロナ禍での学校生活についての思い出を聞く、など経験に即して答えられる問いを想定している。 授業全体を通して、変わりゆく社会情勢に対応していくため、学生が適切な意思決定ができるように促していく。そのために、コロナ禍での学校生活の体験談など、学生の声を集約し発問することで、授業内容をより身近に感じてもらうことを期待する。